

琉球大学学術リポジトリ

脱「沖縄」研究へ：
閑却された「見えない」住民を磁場に

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2017-09-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山根, 清宏, Yamane, Kiyohiro メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/37247

脱「沖縄」研究へ

— 閑却された「見えない」住民を磁場に —

山根清宏*

The secession from "Okinawa" study

— From the viewpoint of the inhabitants who are neglected invisible —

Kiyohiro YAMANE

はじめに

2016年10月26日から30日にわたり第6回の世界のウチナーンチュ大会が「ウチナーネットワークを持続的に継承、発展させるとともに、沖縄独自のソフトパワーを国内外に発信し、その魅力と可能性を活用して沖縄の未来を切り開いていくこと」を目的に開催された（第6回世界のウチナーンチュ大会実行委員会事務局 HP）。沖縄というルーツこそが、彼ら/彼女らを沖縄へと誘う大きな動機としてあり、それは過去から現在、そして未来へと連なる時間軸に自らを重ね合わせ、ルーツとしての沖縄の地を踏むことによってウチナーンチュとしてのアイデンティティを確認するイベントであった。

しかし本土からの移住者にとっての沖縄はそれとは異なる「姿」で立ち現れる。本土から沖縄移住したのち「大阪生まれの二世に沖縄の基地問題の痛みがわかるのですか」といわれた経験をもつという仲村清司は「沖縄にルーツがありながら、沖縄が本土復帰するまでは「在日二世」として内地で暮らし、……アイデンティティがあやふやで、それゆえ二つの足場を交錯させながら物事を考える性質がある」という。そして「基地問題をめぐって日本政府と沖縄の間の「溝」が深まると、とたんに移住者の肩身は狭くなる。表現を変えれば、本土から沖縄に移り住んだ者は多かれ少なかれその溝の深度を測りながらタブーを抱えて暮らして

いるといおうか。沖縄には本土や本土出身者に対する紋切り型の侮蔑的な表現がある。「腐れヤマトゥー（腐った本土人）」「腐れナイチャー（腐った内地出身者）」など、いわゆる「洗礼用語」がそれである」と移住後の自らの経験を記している（仲村, 2016）。

またこの「溝」は沖縄にルーツを持たない本土出身の沖縄移住者においては日常的な「壁」として立ち現れることになる。須藤直子は、沖縄で「移住者」として定住する過程は、「移住前の「受容」されていたという感覚から、移住後の「排除」されていくという対照的な立場への移行を一時的に実感すること」であると述べている（須藤, 2013: 157）。また本土出身のある沖縄移住者夫婦が、「よそ者であることを日常的に自覚し、「一歩も二歩も引く」という姿勢を貫徹しながらも、ナイチャーと地域住民との間に「壁」を感じてきた」ことにふれ、「沖縄移住という現象は、沖縄と本土間における緊張関係の持続と、その関係性の再生産のある部分では露呈」させることであると指摘している（須藤, 2014: 171）。

このように沖縄はウチナーンチュにとってはアイデンティティの源泉となりうるが、本土出身の沖縄移住者にとっては沖縄・地元住民との緊張関係を生み出す要因としてあり、沖縄はそれを経験するものに対し全く異なる様相を呈するものとしてあるのである。ポストコロニアリズム研究にお

* 琉球大学教育学部教員

いて本土と沖縄の関係を捉える野村浩也が言うように「日本人が植民地主義のターゲットとして沖縄人に搾取や差別を行使したからこそ「日本人＝植民者／沖縄人＝被植民者」という二項対立が構築された」という指摘に基づけば、本土移住者が沖縄で「溝」、「壁」を経験することは当然の帰結として考えることができるだろう（野村，2007:42）。だが、そうだとすると仲村が「大阪生まれの二世に沖縄の基地問題の痛みがわかるのですか」と言われるとき、彼のようなマージナルな存在は「日本人＝植民者／沖縄人＝被植民者」のどちらに区分されるのであろうかという問いが浮上する。

確かに解明すべき課題、目的によっては本土と沖縄という二元対立図式は認識枠組みとして有効である。しかしながら沖縄社会の実態把握、沖縄社会内部の多様性、多層性の把握を試みようとするとき、二元対立図式による社会認識はマージナルな境界上の存在を隠蔽することで可能な認識枠組みでしかない。それゆえ沖縄社会の社会学的解明を試みようとするとき、ひとまずは二元対立図式において採用されている概念、カテゴリーを「カッコに入れる」ことを要請しなければならない（Berger.Kellner, 1981=1987:75）。

そこで本稿では、まず沖縄とは何かということの検討を通じ「沖縄」認識に貫かれている二元対立図式という様式の析出を試みる。そのうえで社会学における「沖縄」研究がいまなお二元対立図式に基づく認識様式に拘束されていることを明らかにするとともに今後要請される沖縄研究の課題を析出することを目的とする。

なお、本稿では括弧付きの沖縄（「沖縄」）と括弧なしの沖縄（沖縄）を沖縄の認識様式の差異に基づき区別する。前者は本土と沖縄という二元対立図式のなかで認識される「沖縄」とし、後者はその認識様式に抛らない沖縄と定義する（引用箇所を除く）。

1 沖縄とはなにか？

1-1 沖縄と二元対立図式

沖縄とは「地域用語」としてあるが同時に「琉球文化圏からなる社会」をさす。地理的には、奄美群島から八重山群島までの南西諸島からなる島嶼社会を意味し、歴史的には南島あるいは琉球と

よばれ、また沖縄と琉球は互換的に使われているが、「前近代期は琉球、近代以降（1897（明治12）年の廃藩置県）は沖縄が一般的に使用されているとみてよい」と考えられている（波平，2002:150）。

しかしながら、こんにち日常的に使用される沖縄の含意はそれだけに留まらない。沖縄は地域用語として使用される場合であっても、それが示すのは沖縄（本）島なのか離島なのか曖昧であり、また「字」や「シマ」などの局所的な地域が想定されている場合もある。地域用語として日常的に使用されている沖縄という用語であるが、それは使用される文脈に大きく依存した多義的な用語、マジックワードとしてあるのである。

では、沖縄は多義的用語としてどのように使用されているのであろうか。大別するならば、それは政治的文脈、文化的文脈、経済的文脈に区分することができるだろう。

政治的文脈に従えば、沖縄とは日本における「構造的沖縄差別」の被差別者を表象する。それは新崎盛暉の次の記述から読み取ることができる。差別問題を考えるとき「私にとっての喫緊の課題は、……政策的に積み重ねられ押し付けられてきた「構造的沖縄差別としての日米安保」であった。……「構造的沖縄差別」に即していえば、日本、米国、沖縄、基地などさまざまな要素が織りなす構造において、沖縄への基地押し付けを中心とする差別的仕組みは、日米安保体制維持のために不可欠の要素とされてきた。そしてそれは、時の経過とともに、「沖縄の米軍基地に対する存在の当然視」という思考停止をも生んだ。……こうした政治の現実に対して、沖縄では、多くの人が「(構造的)差別」という表現を使わざるを得なくなっているのである」（傍点筆者，新崎，2012:12-3）。

また文化的文脈に従えば、近代社会において既に失われたものがいまなお残るノスタルジアの対象地として沖縄は位置付けられる。この点に関し、田仲博康は次のように述べている。「もともと時間軸を遡るノスタルジアであったはずのまなざしは、やがて空間上のある一点に焦点化されていく。「沖縄」とは、こうしたまなざしが向かう地点、それ自体は不在である特権化された〈場〉に与えられる名前なのだ。いったん名前が与えられると、物語化された〈島〉は独り歩きを始める。そこにお

いて「沖縄」は、語り手の内に満たされないものを補ってくれる〈装置〉として機能し始める」（田仲，2010:95）。

そしてノスタルジアの対象地である沖縄は経済的文脈に接続され、「癒しの島」という観光消費地として設定される。この点に関しても田仲は、沖縄という「南海の楽園」の創出について「欲望を誘う南の島としての「沖縄」のイメージ。それは復帰以降、観光を県の基幹産業として位置づける政府主導の沖縄経済振興政策の中で作り上げられ、現在ではほぼ定着していると言えるだろう。かつて南太平洋の「楽園」が西欧のまなざしの中で想像/創造されていったように、「南海の楽園」沖縄も他者のまなざしの先に結ばれるイメージとして構築されてきた。沖縄に来る者の多くは、イメージ通りの沖縄を求めてやって来る。……風景は概ねこのようにして消費されていく」と述べている（田仲，2010:178）。

このように沖縄は政治的、文化的、経済的な文脈に依存しながら多義的用語として使用され、一義的な概念定義は難しい。しかしながらこれらの「沖縄」認識に通底するものとして解読されるのは、沖縄が構造的差別における支配/被支配関係、まなざす/まなざされるという主体/客体関係、観光資源の消費/被消費関係というように常に本土との関係のなかで捉えられているということである。つまり、「沖縄」認識は本土との二元対立図式に貫かれ、その認識枠組みのもとで「沖縄」は言説化されているということである。

だが、二元対立図式へ還元することによってなされる「沖縄」認識は、沖縄社会の平板化、単純化を招く。そこでは沖縄社会内部の多様性は捨象され、本土との対比のなかでのみ可視化可能なものが沖縄社会にある「事実」として析出されるに過ぎない。かつて「地域」認識について検討した西澤晃彦は、「ひとたび概念が構築されると、その概念が認識の参照装置として発達・増殖し、生々しい現実からの防護壁として硬直的に機能してしまうことがある。そして、そうした概念によって切り取られた「事実」なるものが、ありきたりの「ストーリー」でしかなく、「神話」と妙に響き合うものとなることも多いのである。それゆえ、……社会についての思考は、私たちに取りつくこの認

識上の隠蔽作用をいかに相対化するのかという課題を抱えていると言える」と指摘した（西澤，1996:48）。二元対立図式に基づく「沖縄」認識が「認識の参照装置」として機能するとき、それは「認識上の隠蔽作用」として機能することであり、その帰結として沖縄社会は本土との関係のなかでのみ捉えられる平板化した社会として理解されるのである。

すでにこれまでも「沖縄の…」/「沖縄的…」といったテーマで沖縄社会の解明が試みられてきた。しかし「沖縄の」/「沖縄的」といったところで、「沖縄の」/「沖縄的」の内実を解明しない限り、それは「沖縄の」社会を論じたことでは断じてない。また「沖縄で生じた/生じている事象を検討」すれば、即ちそれが「沖縄の社会を論じること」でも決してないし、沖縄社会を語ったことでも全くない。にもかかわらず二元対立図式という認識枠組みを採用することによって「認識上の隠蔽作用」が生じていることは自覚されないまま沖縄社会は雄弁に語られているのである。

1-2 アイデンティティの源泉として「沖縄」

「沖縄」がアイデンティティの源泉として希求されるとき、「認識上の隠蔽作用」を相対化することはより困難になる。ジグムント・バウマンは、「液状化した」モダニティの時代において「アイデンティティ」は、コミュニティの代用物であることによって、注意を惹き付けたり、情熱をかきたてたりすることができる。つまりそれは、急激に私化、個人化が進み、急速にグローバル化する世界ではもはや手に入れることができず、まさにそれゆえに安心でき信頼できる居心地のいい避難所として支障なく想像することができ、そういうものとして熱心に望まれている、いわゆる「母なる故郷」の代用物であることによって、ということである」を述べている（傍点ママ，Bauman, 2001=2008:206-7）。こんにち「沖縄」は、政治的、文化的、経済的な文脈に依存した多義的用語としてあるだけでなく、「コミュニティの代用物」、「母なる故郷」の代用物としてアイデンティティの源泉としてもあるのである。

アイデンティティには、つねに現在の視点から

選びとられ再構成された自らの集団の歴史や伝統を共有することで形成される面があるのだが（岡本，2016:15）、そのとき「安心でき信頼できる居心地のいい避難所」として「熱心に望まれる」「母なる故郷」であるためには、「伝統」の共有が不可欠とされる。吉野耕作はホブスボームの「伝統の創造」に言及しながら、「急激な社会変動と頻繁な社会間交流は……「伝統の創造」の過程に促進的である。「伝統の創造」は、自集団の「歴史」を使うという発想から、現在に生きる人間の過去との連続性を確保すると共に、他者には無い自らの伝統の所有を強調するので他者に対する差異感の源泉となり、民族のアイデンティティを維持、強化する」と述べている（吉野，2006:44-5）。「沖縄」は「伝統」と関係付けられることによってアイデンティティの源泉として成立し、維持、強化されていくのである。このことは世界のウチナーンチュ大会の目的に関する次の記述からも読み解くことができる。

「沖縄アイデンティティの継承が海外の県系人コミュニティにおいて大きな課題となる中……次世代への沖縄アイデンティティやウチナーネットワークの継承を強く意識した取組がなされてきた。……第6回大会においても、次世代への継承は大きなテーマの一つとして、取組を充実させる必要がある。海外における沖縄アイデンティティ

は、主に県人会などの伝統芸能や三線、空手、その他の様々な文化活動を通して次世代へと継承されていることに鑑み、第6回大会では、沖縄独自の文化や風土、歴史、いわゆるソフトパワーの魅力が県民が再認識するとともに、移民の歴史やウチナーネットワークの重要性とその拡大、発展に大会が果たしてきた役割について、広く県民へアピールできる取組を推進したい。」（傍点筆者，第6回世界のウチナーンチュ大会実行委員会事務局HP）

そして5年おきに開催される世界のウチナーンチュ大会に呼応するように在沖メディアでは「ウチナーンチュ」（うちなーんちゅ）（図1の「ウチナーンチュ+うちなーんちゅ」）という用語が紙面で頻繁に使用されている。それはアイデンティティの源泉としての「沖縄」を喚起するものとして作用していることを示唆する。こうして「伝統の創造」は内集団の時間的連続性維持・促進および外集団との距離維持・促進を同時に促進する過程」（吉野，2006:46）となって「沖縄」はアイデンティティの源泉となり、そして「安心でき信頼できる居心地のいい避難所」として支障なく想像することができ、そういうものとして熱心に望まれている、いわゆる「母なる故郷」の代用物となるのである。

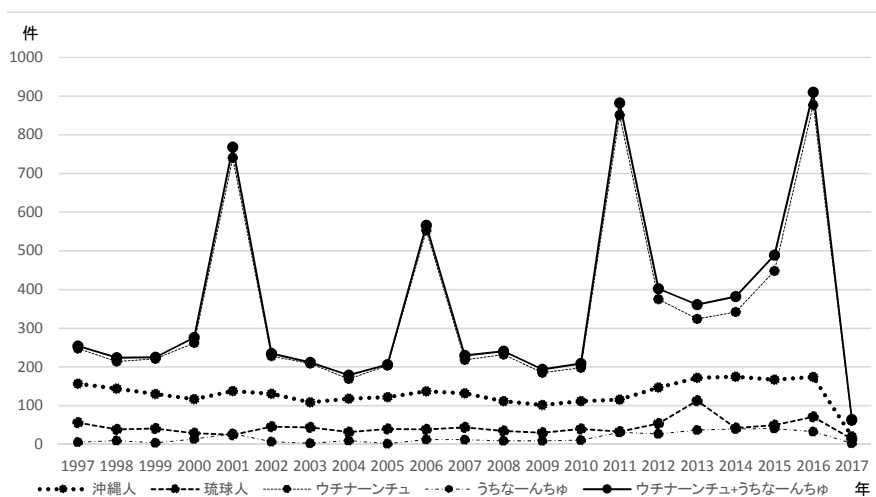


図1 在沖メディア（沖縄タイムス）における「沖縄人」「琉球人」「ウチナーンチュ」等の表記別記事数（1997年～2017年3月3日）

しかしながら沖縄における伝統芸能の現代的変容を検討した友岡邦之は、文化的に豊かといわれる沖縄においても、伝統文化は地域共同体の論理からは乖離しており、「伝統文化とは、少なくとも現代においては、人々の慣習的行動や属性を無条件に規定するものではなく、人々が自己規定したいと欲する際に利用される資源の一つでしかなく、「伝統文化」や地域住民に均しく共有されるものとしての「文化的アイデンティティ」を実体的に措定することはできない」と述べている（友岡，2001:153）。「内集団の時間的連続感の維持・促進をめざした「伝統の創造」を文化が担うことが難しい状況がすでに現出しているのである。

そうしたなか、近年、政治領域において沖縄のアイデンティティが唱えられるようになっていく。政治学者の島袋純によれば、沖縄の「アイデンティティ」が頻繁に言及されたのは、2014年の県知事選で翁長雄志が「イデオロギーよりもアイデンティティ」と訴えて以降であり、それまでは「選挙母体、政治的な基盤を、保守系から共産党まで含めて幅広く求めて、その集結軸として沖縄アイデンティティを用いることはなかった」という。そして「今、沖縄で共有され強く主張されているアイデンティティとは、琉球王国に直接由来するというよりも、戦後の苦難の歴史の共有に基づくものといえるであろう」と指摘した（傍点筆者，島袋，2015）。また熊本博之は、この点に関して「自集団が危機にさらされていると実感されたときに、自己カテゴリーの見直しが進む……沖縄が2009年9月の民主党政権発足以降の展開のなかで経験してきた一連の事態は、まさに沖縄にとっての「危機の実感」だった。この過程をとおして沖縄では、……「イデオロギーよりもアイデンティティ」と訴えることで、日本の一県ではあるけれども、本土の他県とは異なる民族的ルーツをもつ沖縄に自己カテゴリー化したオール沖縄勢力の台頭をもたらしたのである」と分析している（傍点筆者，熊本，2016:78-9）。

「沖縄」のアイデンティティが政治領域から唱えられることとは、アイデンティティの維持に不可欠な歴史の共有、「伝統の創造」が文化領域から政治領域へと移行（または併存）することによって維持、強化が図られているということを示唆する

ものである。だが、ここで重要なのはアイデンティティの源泉として希求される「沖縄」は、二元対立図式という認識枠組みから離脱するものではないということである。それは「戦後の苦難の歴史の共有」、「沖縄にとっての「危機の実感」という対本土との関係性のなかで捉えられたものであり、それは「認識上の隠蔽作用」の相対化を阻害するものとして機能するものなのである。

そしてこうした「沖縄」認識は、社会学の「沖縄」研究を拘束するものとなっている。「沖縄の対「日本」関係が重要な論点」（野入，2012:67）であった社会学の「沖縄」研究は、二元対立図式による「沖縄」認識を採用することで沖縄社会を対象化してきた。だがそれは「認識上の隠蔽作用」によって沖縄社会内部へ入り込む研究の契機を奪い去るものであったのである。

2 「沖縄」に拘束された「沖縄」研究

2-1 他者化

「琉球文化圏からなる社会」とされる沖縄社会は、伝統的に自己完結的な小宇宙社会である「シマ」を基本に重層的体系をなす複合社会である。そうしたなか社会学における沖縄研究は、米軍基地と不可分の関係のなかで形成された沖縄の都市化や沖縄本島都市圏へ流入者が組織した郷友会に着目した沖縄都市社会の構造分析、また過剰都市化、沖縄型都市化の解明などが主題とされてきた（波平，2002:150-63）。

そのなかで、那覇都市圏における「過剰都市化」(over・urbanization)を支えている社会的メカニズムの解明を試みた鈴木広は「沖縄県はいくまでもなく独立の一国ではなく、日本の一県にすぎないとはいえ、それは本土の所見とは全く異質な強い特殊性をもっている。……まず沖縄の歴史的特性の故に、それは本土とは自他ともに「異質」だと容易に認識しうるような社会文化的風土があり、好むと否とにかかわらず、日本の中の異国といった印象・自意識がある事実は否定しうべくない。つまり、ある程度まで、社会のある局面にかんして、沖縄は仮説的に一つの独自の「全体社会体系」(total social system)と見做し、そうであるかのごとくに、取扱うことができる」と述べ、日本社会における沖縄社会の異質性を強調してい

る(鈴木, 1986:391)。

そして異質性の強調はこんにちにおいても決して衰えることなく、メディアを通じて日常的に喧伝されてもいる。たとえば6月23日の「慰霊の日」に関する沖縄と本土での報道について検討した山腰修三は、「沖縄社会を他者化する視点の問題」について指摘している。「全国ニュースの「慰霊の日」報道においては、「沖縄の問題をわれわれの問題として捉えなければならない」という言明が繰り返された。しかしながら、ニュースのナラティブの中に沖縄社会を「彼ら」、すなわち「われわれ」とは異なる他者として表象するいくつかの傾向を見いだすことができる」。そして「沖縄を訪れ、沖縄問題を「(再)発見」するニュースの構成は沖縄社会を「他者」として表象する効果を有する。こうした表象は、本土社会における「慰霊の日」について「われわれ」の記憶として想起することを困難にする。そしてたとえ「沖縄戦」と「基地問題」を意味連関させるメディア言説を編制しえたとしても、沖縄社会を「他者」とする定型的な語りを毎年繰り返すことは沖縄社会と本土社会、双方のオーディエンスの認識のギャップを維持、ないし強化する可能性を有する」と(山腰, 2012:159)。

異質性の強調は、沖縄社会を説明する際の独立変数として「沖縄」を捉えることである。ア・プリアリに「沖縄だから…」といった解釈回路が前提とされ、「沖縄」自体への問いは不問にされる。そうした解釈回路に対し、波平は沖縄の離婚について検討するなかで、「高い離婚率の背景を沖縄における特殊な都市化から導き出すのであり、一般的言説にみられるような沖縄の婚姻・離婚に対する許容度の問題、要する文化的地域特性を考察の対象から省く。……変則的で特殊な都市化がその後の離婚率を高める何らかの効果を及ぼしているという視点である。……また沖縄の地域特殊論に立つものでもない」と述べ(傍点筆者, 波平, 2006:2)、ア・プリアリな解釈回路とは異なる都市化理論に基づく解明を試みた。

しかしながらそのような研究が十分に蓄積されることはなく、「沖縄」を異質な他者とする認識態度は、社会学における「沖縄」研究を水路付けることになったのである。本土復帰以降の社会学的

研究の動向について、安藤由美は、「まず、一貫して沖縄は、人口の大部分が集中する都市化された地域ではなく、辺境(離島)の村落社会として対象化されてきた。ただ、1990年代以降、都市部も含めた、開発や軍事基地負担の受業者およびエスニック・マイノリティとしての対象化、そして2000年以降は、これらの解決を目指すポリティカルな実践の記述・分析へと重心が移動してきた」。そして時代の流れとともに研究動向が変化したとしても、「ただ、1つ変わっていないように思えるのは、どこか沖縄は、明示的にせよ、暗示的にせよ、社会学が想定してきた日本という全体社会の外側に位置づけられてきたことである」。それゆえ「社会学がもつ、沖縄イコール近代化の遅れた辺境社会というまなざしそのものが、自ら沖縄への関心を遠ざけてきたとはいえないだろうか」と述べ、その帰結として「沖縄をいつまでも他者化しておく結果をもたらしかねない」と総括している(傍点筆者, 安藤, 2013:301-2)。

こうして日本社会の外部へと位置付けられ他者化された「沖縄」によって、沖縄社会は平板で均質な社会として設定され、その内部構造の解明は不問にされたのである。いくつもの島によって構成された沖縄の地域差は容易に想像できるのであるが、そうした差異は捨象され、対本土との関係のなかで「沖縄」を捉えることが中心的な関心だったのである。このことは、社会学の「沖縄」研究において「認識上の隠蔽作用」の相対化が十分になされなかったことを意味するものである。

2-2 沖縄的共同体?

こうして二元対立図式による「沖縄」認識と「沖縄」研究は、その帰結として生じる均質な沖縄社会という設定を相対化することができなかつた。鈴木広は「沖縄における都市化と産業化は、つねに親族結合とシマ結合を再生産し再強化するというパターンをとりつづけており、それが那覇都市圏のモザイク的社会構造を再現してきた事情である。モザイクをなすそれぞれの共同態のなかには、きわめて強い水準的集団形成が展開し、その集団メンバーは物心両面にわたる助け合いをおこなっている」と述べ、親族結合、シマ結合を基礎とする沖縄の社会構造の特質を析出した(鈴

木, 1986:415)。しかし、こうした二元対立図式による「沖縄」研究は、その後の沖縄の社会学的研究へ大きな影響を及ぼすこととなり、「都市、階層・階級、家族、ジェンダーといった沖縄内部の差異化・構造化の観点から切り込む研究の圧倒的な不足」という事態を招くことになったのである(安藤, 2013:301)。

こうした研究動向に対し、岸政彦は「私たち社会学者は、その多様性や変動、あるいは「被構築性」に目を配りながらも、基本的には沖縄の社会構造の特性を描くとき、本土の都市部と比べて強いといわれる共同体的つながりを中心に据えることが多い。沖縄社会は、インフォーマルな横のつながりによって構成される、共同体社会であると描かれている」が、「沖縄の共同体は、沖縄で暮らすすべての人びとを、同じように包摂しているわけではないし、沖縄の人びともまた、その共同性を同じように経験するわけではないのである」と述べ、「これまでの先行研究における沖縄社会の共同体的構造に対するロマンチックな一般化を排し、亀裂と多様性を考えるためのひとつのアプローチとして、フィールドワークを通じて、階層とジェンダーから沖縄社会を捉え返すことを構想」するのである(岸, 2016:63-74)。

そして岸は、安定層(教員・公務員・大企業社員など)は沖縄の土着的な共同性からまったく切り離されてしまっているという意味ではないが、沖縄の共同体から「相対的に離脱した」生活をおくっており、彼らは生活に必須の資源としての共同体や同郷性規範からかなり自由であると指摘した(岸, 2014:46)。

また岸の共同研究者である打越正行は「沖縄の共同体は沖縄社会のすべての人びとをカバーしているわけではなく、そこには階層間格差が存在する」こと、そして「下層/不安定層の若者たちにとって、沖縄の共同体は必ずしも生活を扶助してくれるものであるわけではなく、むしろ彼らはその外部にあって、剥き出しの暴力的な上下関係のなかに縛り付けられ」ており、「下層/不安定層としての彼らの生活には、「沖縄的共同性」のセーフティ・ネットも届かない。彼らは沖縄の共同体の外部に生きている」との知見を導きだした(打越, 2014:109-29)。

同じく共同研究者である上原健太郎は「沖縄的共同性論」を展開し、「沖縄に関する社会学的先行研究が、「中間集団レベルでのネットワークや共同性」に関心を寄せ、それを「自明なもの」「所与のもの」として把握してきた。「共同性の性質とその変化、あるいはその機能に議論を集中してきた反面、社会的な位置が異なる人々が、それぞれの日常生活において共同性をどのように経験しているのかという問いを採用してこなかった。社会的な位置が異なれば、そこで生きられる日常生活やその経験の内実も異なるとする見方は社会学の知的伝統である。こうした視点を沖縄的共同性論に導入し、そのうえで、「沖縄的共同性を、「沖縄内部の差異化・構造化」の視点からいかにして描きなおすのか。沖縄的共同性に関する社会学的研究のさらなる深化と展開に向けて、取り組むべき課題はたくさん残されている」ことを指摘した(上原, 2016:19-26)。

この岸らの一連の研究は、それまでの「沖縄」研究に対する根源的な問いの提出であるとともに階層に着目して「沖縄内部の差異化・構造化」を描き出す実証的な試みであった。しかなしながら、そうであったとしても、それは均質な沖縄社会という前提を崩すものではなかったのである。なぜなら、彼らの問う沖縄の共同体(性)、沖縄社会の構成メンバーは、ア・プリオリに民族的に同じルーツだと想定される「ウチナンチュ」/「沖縄人」/「琉球人」⁽¹⁾が前提とされていると考えられるからである。そうであるならば、それは二元対立図式という認識枠組みの維持を強化するものであり、「沖縄内部の差異化・構造化」の析出が十分になされているとは言い難いのである。

3 沖縄社会の「見えない」住民

「沖縄」研究は、「ウチナンチュ」/「沖縄人」/「琉球人」とカテゴライズされる歴史的に琉球または沖縄に起源をもつと考えられる住民だけが沖縄社会の構成メンバーであるという前提に基づいている。それゆえ「ウチナンチュ」/「沖縄人」/「琉球人」以外の住民は、沖縄社会の住民として認識されないため「見えない」住民として不可視化され、「沖縄」研究の中心的な対象に設定されなかった。そして、こうした状況は、二元対立図式と

いう認識枠組みに拘束された「沖縄」研究の帰結としてあるのである。

「沖縄的なるもの」の検証を試みた谷富夫は、「沖縄が全体として今も伝統的な「シマ社会」によって成り立っていると見なすことが許されるならば」という留保のもと那覇都市圏の過剰都市化の検討を通じ、現代における「沖縄的なるもの」の検証を試みている。だが、那覇都市圏への人口集中を考えるにあたってその対象となるのは「大部分が系列企業・官庁、自衛隊などの転勤、転属であり、沖縄の失業現象との関連は少ない」とされる本土出身者、Iターン者、また「顕在的な都鄙間格差で大部分の説明がつく」県内他地域からの直接流入者ではなく、もっぱら本土からのUターン者に限定されている。そしてその検討を通じ「沖縄的なるもの」と互換的に使用される「沖縄的生活様式」（自力主義、家族主義、相互主義）の存在が検証できたと述べる（谷, 2014:2-22）。しかしUターン者を対象とした生活様式を「沖縄的」または「沖縄的なるもの」と捉えることは的確ではない。なぜなら、谷の捉えた「沖縄的なるもの」、「沖縄的生活様式」は対象を限定しており、沖縄社会における生活様式を抽出したとは考えられないからである。さらに、このような把握は、本土移住者や外国人が増加することによって沖縄社会内部での異質性が高まるなか、その異質性をも包摂するものとして「沖縄的なるもの」が存在していることを認めるものではなく、異質性を排除し、そのうえで「沖縄的なるもの」を掘り起こし「再確認」したものでしかない。それを「沖縄的なるもの」を認定したとしても、それは「沖縄的」などでは決してないのである。

確かに沖縄をテーマにしたこれまでの社会学的研究のなかには民族問題ないしナショナリズムの観点からエスニック・マイノリティ（外国人、日系人、アメラジアン）に対する差別、排除が根強いことが指摘されてきたが、沖縄社会内部のエスニック・マイノリティの剥奪状況や民族関係は十分に問われてこなかった（安藤, 2013:299）。その背景には「沖縄自体が、明治12年の琉球処分を契機に近代日本の中央集権国家体制に組み込まれて以来、これまで日本社会のマイノリティとして処遇されてきたという歴史的経緯があ」り、「加え

て、沖縄が戦後長期にわたって米軍統治下におかれ、沖縄に居住する外国人の圧倒的多数がアメリカ人、しかも米軍関係者（現在もそうである）という特殊事情」も要因としてある（安藤, 2007:3）。それゆえエスニック・マイノリティを対象とする研究は周縁化され、彼ら/彼女らは不可視化された「見えない」住民として「沖縄」研究では扱われてきたのである。

「見えない」住民の一端を近年の在留外国人の動向からみてみると（表1）、全国的に在留外国人が増加しているなか沖縄県においてもその数が2010年以降一貫して増加傾向にあることがわかる。

年	沖縄県	全国
2006	8,703	2,084,919
2007	8,914	2,152,973
2008	9,126	2,217,426
2009	9,038	2,186,121
2010	8,933	2,134,151
2011	9,276	2,078,508
2012	9,404	2,033,656
2013	10,198	2,066,445
2014	11,229	2,121,831
2015	12,925	2,232,189
2016	14,285	2,382,822

表1 沖縄県における在留外国人
(2006~2016) (人)

では、そうした状況において沖縄社会は彼ら/彼女らをどのように「受け入れてきた」のであろうか。日系人、アメラジアンについて次のような記述がなされている。

「日系人にとって地縁・血縁関係をもとにしたアジアール（避難所）にはなりえていない（期待していた心の安定がもたらされない）。それは、地縁・血縁関係を重視していた沖縄社会の変動が大きく反映していると思われる。……定住外国人にとっても沖縄社会はけっして入り込みやすい場とはいえない。」（鈴木, 2007:70）

「生まれ育った故郷に戻ってくる一世の場合と異なり、二世以降にとってはあらためて居場所を確保しなければならない、異郷なのである。……意識のうえでは門中制度やウチナーンチュ意識に

よってつながりを持っていたとしても、「想像の共同体」はやはり想像のもので、実感的には作動しない。そこでは彼らは外国人同様の入り込み戦略を要求される。そのギャップが、ときに語られる「故郷のぬくもりへの失望」を形づくっているのかもしれない。「沖縄社会といえど地域や親族の連帯が強調されることが多いが、外国人・日系人の生活はそこにはないようである。」(崎濱, 2007: 82-3)。

「ウチナンチュウのアイデンティティを主張する時にアメリカンが向き合わねばならない問題がある。それは、沖縄人のアイデンティティは沖縄人の両親のもとに生まれることで生物学的に獲得するものだ」と世間的に考えられていることだ。片親だけが沖縄人だったり、両親ともに沖縄人ではないのに自分は沖縄人だと言うと、懐疑的で納得がいかないという態度を向けられる。周りからウチナンチュウとして受け入れられず、代わりにアメリカンというレッテルを貼られるとすれば、自分を沖縄人だと考える人は悩むことになるだろう。」(マーフィ重松, 2002:187)

「グローバル化の進行により沖縄の社会構成員がはっきりと多様化しつつある。……ホスト社会(沖縄社会)の文化支配が持つ力はまったく緩まない。……ホスト社会の支配文化のメカニズムは、自らの文化の優位性を壊さない仕組みを作りあげているのである。」(括弧内は筆者による加筆, 国吉, 2005:83)

くわえて沖縄社会の「見えない」住民には本土移住者(ナイチャー)も含まれる。須藤は、よそ者であることを自覚することに加え、本土出身者(ナイチャー)であることも日常的に意識してきたというある本土移住者の夫婦の語りと本土からの移住の意味について次のように記している。

「いろいろ海外とかも行ってたし、まあ相当ね、(ナイチャーに対する評価は)ある程度覚悟はしてきたし。でもまあ、ある意味当然のことじゃないかな、とも思うし。日本がやっぱりこっち(沖縄)にしてきたことっていうのも、やっぱり常に

そういう意識はあるよね。やっぱりホントにひどいことしてきて、向こう(沖縄)の人たちがナイチャーに対してどういう感じで見てるのか、とか。人によって価値観は違うと思うけど、でも、そういうのももちろんあって当然だなんて思いながら。」(移住者夫婦の語り, 須藤, 2014:166)

「観光客から移住者に移行することは、移住前の「受容」されていたという感覚から、移住後の「排除」されていくという対照的な立場への移行を一時的に実感することではある。しかし、受容から排除という変化を経験しながらも、沖縄で生活を続けることで、「ナイチャー」として沖縄で生きる覚悟ができるようになったと考えられるのである。さまざまな葛藤や苦悩を経験し、それでも沖縄の生活を継続した…移住者の語りに、少なからずその覚悟が示されている。……(それは)「ナイチャー」というアイデンティティを獲得していったと言える。」(括弧内は筆者による加筆, 傍点筆者, 須藤, 2013:157)

これらの記述から「見えない」住民が日々繰り返る生活世界とそこで取り結ばれている社会関係の様相を窺い知ることができる。だが、ここで留意しなければならないのは、日系人、アメリカン、本土移住者(ナイチャー)らが経験した「沖縄社会への入り込みにくさ」、「故郷のぬくもりへの失望」、「懐疑的で納得がいかないという態度」、「葛藤や苦悩」を根拠に沖縄社会とは極めて閉鎖的、均質的な社会であるという結論を安易に導かないことである⁽²⁾。

かつてアジア系外国人の流入する池袋、新宿で調査を実施した奥田道大によれば、池袋は「もともと地方からの若年単身者を受け入れてきた実績をもつので、人の出入りが多い。したがって人のプライバシーには立ち入らない、そっとしておく、その人が本当に困ったときに手助けする、手助けできないでもそのような心の用意をするのが、地域生活上のルール、けじめであった。そのような土地の気風が残っているだけに、国内ではなく海外からニューカマーズといっても、とりたてて「異邦人」視することなく「共同生活の規範、様式である「共生の作法」がつくり上げられてい

たという(奥田・田嶋, 1993:307-13)。

奥田の析出した「共生の作法」とは、多くの異質な他者を包み込んだ都市・池袋の地に刻まれた「土地の気風」によって生み出された作法としてある。そして重要なのは、それが「ニューカマーズ」を「外国人」といったカテゴリーを適用することや「異邦人」視したりすることによって創造されたものではなかったという点である。つまり「共生」というものは「人びとが用いるカテゴリーの更新の過程」としてあり(丹治, 2016:267)、その「人びとが用いるカテゴリー」とは、「当事者の主観・生活に根ざしたカテゴリー」であり、「アジア系」などというカテゴリーによって括られるものではなく、「エスニシティ、階層、法的身分等々に基づいた細やかなカテゴリー」によるものだという点である(西澤, 1996:57)。

こうした認識のもと沖繩社会の「見えない」住民の可視化を試みようとするとき、それは「外国人」、「日系人」といったカテゴリー間の相互作用を焦点化するのではなく、「当事者の主観・生活に根ざしたカテゴリー」に基づく社会関係を照射し、その記述を試みる点である。同時にそれは沖繩社会における「共生の作法」の析出の過程でもある⁽³⁾。「見えない」住民として外国人、日系人、アメリカン、本土移住者(ナイチャー)が沖繩社会に定住化するなか、彼ら/彼女らの日々の相互作用の過程でいかなる「共生の作法」が創造されているのか、沖繩社会は異質な他者を包摂するだけの寛容性を持ち合わせているのか、それとも「外国人」と「ウチナーンチュ」といったカテゴリー間の境界を堅持し異質な他者を排除するのか、その析出が要請されるのである。

こうした沖繩社会における「共生の作法」の析出とその記述とは、二元対立図式という認識様式およびそれに起因する「認識上の隠蔽作用」を相対化することによって目指されるものであり、それによってこそ沖繩社会内部を照射することは可能となるのである。「見えない」住民に寄り添った沖繩社会の理解が目指される。こうして社会学の沖繩研究は「沖繩的なるもの」の解明へ向けた手筈をようやく整えることができるのである。

結語

「沖繩」研究および沖繩社会を捉える視座は、二元対立図式による認識様式に貫かれていた。だがそれは隠蔽装置(「認識上の隠蔽作用」として機能し、沖繩社会内部の照射を阻害するものでもあった。社会学における「沖繩」研究はその認識枠組みを十分に相対化するには至らず、「沖繩」の他者化、「沖繩」=均質な住民(「ウチナーンチュ」/「沖繩人」/「琉球人」)を前提とすることで、沖繩社会の共同性を論じてきた。そしてその帰結として沖繩社会内部の「外国人」らは不可視化され、「見えない」住民として「沖繩」研究の周辺へと追いやられたのである。

いま、脱「沖繩」による沖繩研究(脱「沖繩」研究)が要請される。それは日本社会からの他者化と沖繩社会内部の異質性の隠蔽によって成立した「沖繩」研究を相対化することであり、離脱することである。たとえば、それは「沖繩だから…」といった物言い自体を問い、その前提とされる「沖繩とは何か」という根源的な問いからはじめることができるだろう。沖繩で生じた事象を扱うことが、すなわち沖繩社会を語ることで決まらず、沖繩社会を説明したことには一切ならないのだから。硬直化した二元対立図式、「外国人」といったカテゴリー間の相互作用を焦点化する認識様式を廃棄し、「カテゴリーの更新」をともなった新たな認識枠組みの獲得とそれに基づく脱「沖繩」研究の蓄積が要請されるのである。

注

- 1) 「ウチナーンチュ」/「沖繩人」/「琉球人」の各定義を明確に定めるのは難しい。参考までに『オキナワなんでも事典』の「うちなーんちゅ」という項目をみると、「沖繩の人。「沖繩」は「うちなー」、「人」は「ちゅ」という。……沖繩県民＝「うちなーんちゅ」ではないのだ。……「うちなーんちゅ」という場合、どこかで「やまとんちゅ」との線引きをしているのだ。(世界のウチナーンチュ大会の状況をみると)単に対やまとうんちゅ・アイデンティティとしてのみ「うちなーんちゅ意識」があるわけではなく、自らの文化的アイデンティティを見つめ直す視点として「うちなーんちゅ意識」があるようだ」とある(括弧内は筆者による加筆, 新城, 2003:87-8)。「ウチナーンチュ」/「沖繩人」/「琉球人」の各

用語の定義、メディアでの使用頻度および記事等の内容分析などを本稿で展開することはできない。別稿にて論じることとする。

- 2) 玉城隆雄はジェンダーの視点から沖縄の家族制度について検討し、「沖縄の構造的な問題は、トートナー問題に象徴される。その背景に、前近代的な沖縄の社会構造がある。つまり、沖縄では社会関係を規定している社会的・文化的諸条件の中で、血縁的結合、地縁的結合、性差と長幼の順列に基づく身分関係、共同体的秩序、宗教的（祖先崇拝的）価値、人格的非合理等が優越している」と述べている（玉城、1998:84）。玉城の指摘する沖縄の社会関係が、外国人、本土移住者（ナイチャー）らが沖縄社会へ「入り込む」とき何らかの影響を及ぼしていることが予見されるが、その関係性について本稿で論じることができない。今後の課題とする。
- 3) 奥田の捉えた「共生の作法」とは、都市・池袋を対象にして導出されたものであり、沖縄社会で「共生の作法」の析出を試みようとするとき、まずは「沖縄は都市なのか」といった問いが生じる。その場合、いわずもがな沖縄社会における地域差等を考慮する必要があるだろう。さしあたり本稿の記述は、そうした議論の必要性を念頭におきながら、「カテゴリー間の相互作用を焦点化するのではなく、「当事者の主観・生活に根ざしたカテゴリー」に基づく社会関係を照射し、その記述を試みること」の重要性を指摘するものである。

参考文献

- 安藤由美, 2007, 「はしがき」安藤由美・鈴木規之・野入直美編『沖縄社会と日系人・外国人・アメラジアン—新たな出会いとつながりをめざして』クバプロ
- 安藤由美, 2013, 「研究動向」テーマ別研究動向（沖縄）『社会学評論』64巻2号
- 新崎盛暉, 2012, 『構造的沖縄差別』高文研
- Bauman, Zygmunt., 2001, *The Individualized Society, Polity.* (=2008, 澤井敦・菅野博史・鈴木智之訳『個人化社会』青土社)
- Berger, Peter L. Kellner, Hansfried., 1981, *Sociology Reinterpreted*, Anchor Press. (=1987, 森下伸也訳『社会学再考』新曜社)
- 第6回世界のウチナーンチュ大会実行委員会事務局, 『第6回世界のウチナーンチュ大会』 (<http://wuf2016.com/jp/> 2017年4月7日閲覧)
- Hobsbawm, Eric. Ranger, Terence., 1983, *The Invention of Tradition*, University of Cambridge. (=1992, 前川啓治・梶原景昭他訳『創られた伝統』紀伊國屋書店)
- 岸政彦, 2014, 「沖縄の階層格差と共同性—「安定層」の

- 生活史から—』龍谷大学社会学部紀要』龍谷大学社会学部学会44号
- 岸政彦, 2016, 「錯綜する境界線—沖縄の階層とジェンダー—」『フォーラム現代社会学』15号
- 熊本博之, 2016, 「沖縄におけるネイションの位相と米軍基地」岡本智周・丹治恭子編著『共生の社会学—ナショナルリズム、ケア、世代、社会意識』太郎次郎社
- 国吉サオリ, 2005, 「沖縄におけるペルー日系人の文化変容」『移民研究』1号
- 仲村清司, 2016, 『消えゆく沖縄—移住生活20年の光と影』光文社
- 波平勇夫, 2002, 「沖縄社会の変容と現在」鈴木広監修/木下謙治・篠原隆弘・三浦典子編『地域社会学の現在』ミネルヴァ書房
- 波平勇夫, 2006, 「沖縄の離婚—都市化過程からの問題提起—」『沖縄国際大学社会文化研究』9巻1号
- 西澤晃彦, 1996, 「「地域」という神話—都市社会学者は何を見ないのか?—」『社会学評論』47巻1号
- 野入直美, 2012, 「沖縄における外国人に対する意識」安藤由美・鈴木規之編著『沖縄の社会構造と意識—沖縄総合社会調査による分析』九州大学出版会
- 野村浩也, 2007, 「日本人という植民者」野村浩也編『植民者へ—ポストコロニアリズムという挑発』松籟社
- 岡本智周・丹治恭子編著, 2016, 『共生の社会学—ナショナルリズム、ケア、世代、社会意識』太郎次郎社
- 奥田道大・田嶋淳子, 1993, 『新宿のアジア系外国人—社会学の実態報告』めこん
- 崎濱佳代, 2007, 「異質性と向き合う社会での権利問題—主体化をめぐる問題の扱いについての考察」安藤由美・鈴木規之・野入直美編『沖縄社会と日系人・外国人・アメラジアン—新たな出会いとつながりをめざして』クバプロ
- 島袋純, 2015, 「「沖縄アイデンティティ」と沖縄住民の自己決定権」『nippon.com』 (<http://www.nippon.com/ja/in-depth/a04501/> 2017年4月7日閲覧)
- 新城和博, 2003, 「うちなーんちゅ」池澤夏樹編『オキナワなんでも事典』新潮社
- S・マーフィ重松, 坂井純子訳, 2002, 『アメラジアンの子供たち』集英社
- 須藤直子, 2013, 「「沖縄移住」再考—観光客はいかにして「移住者」になるのか—」『琉球・沖縄研究』4号
- 須藤直子, 2014, 「本土出身者の移住をめぐる選択と葛藤」谷富夫・安藤由美・野入直美編著『持続と変容の沖縄社会—沖縄的なものの現在』ミネルヴァ書房
- 鈴木広, 1986, 『都市化の研究』恒星社厚生閣
- 鈴木規之, 2007, 「沖縄社会への定住過程と自治体サービス」安藤由美・鈴木規之・野入直美編『沖縄社会と日系人・外国人・アメラジアン—新たな出会いとつながりをめざして』クバプロ
- 田島久歳, 2007, 「本土社会と沖縄社会の包摂原理の違

いーウチナーンチュ系人と日系人の事例による検証」
安藤由美・鈴木規之・野入直美編『沖縄社会と日系人・
外国人・アメラジアン—新たな出会いとつながりをめざ
して』クバプロ

玉城隆雄, 1998, 「ジェンダーからみた沖縄の家族の特
色とその変化」『'97年国際学術セミナー報告書—家族の
変容:ジェンダーの視点から』沖縄国際大学

田仲康博, 2010, 『風景の裂け目—沖縄、占領の今』せ
りか書房

谷富夫, 1989, 『過剰都市化社会の移動世代—沖縄生活
史研究』溪水社

谷富夫, 2014, 「沖縄的なるものを検証する」谷富夫・安
藤由美・野入直美編著『持続と変容の沖縄社会—沖縄的
なるものの現在』ミネルヴァ書房

丹治恭子, 2016, 「おわりに—共生の追求/追究のため
に」岡本智周・丹治恭子編著『共生の社会学—ナショナ
リズム、ケア、世代、社会意識』太郎次郎社

友岡邦之, 2001, 「伝統文化の活用における代表的使
命感と制度化・私財化」『都留文科大学研究紀要』55号

打越正行, 2014, 「沖縄的共同体の外部に生きる—ヤン
キー若者の生活世界—」谷富夫・安藤由美・野入直美編
著『持続と変容の沖縄社会—沖縄的なるものの現在』
ミネルヴァ書房

上原健太郎, 2016, 「沖縄的共同性論の射程—社会的
探求のさらなる展開に向けて—」『龍谷大学社会学部紀
要』49号

山腰修三, 2012, 「沖縄の「苦難の歴史」をめぐるテレ
ビニュースの言説分析」『慶應義塾大学メディア・コミュ
ニケーション研究所紀要』62号

吉野耕作, 2006, 『文化ナショナリズムの社会学—現代
日本のアイデンティティの行方』名古屋大学出版会